

道路の両側に白線が引いてある。歩道を示すものである。人間はこの白線の内側を歩けというのだが、この歩道がいつでも車で埋まっていたり、商店の荷がはみ出していたりして、おそらく歩く人間のものであったためしかない。ある商店の前では山のような荷を積んだ大型トラックがとまっていて、見通しもきかず、わきをよけて行こうとすれば、向うから来る車がすれすれに走り過ぎる。もう少しではさみうちになれそうになる。これでは正に彈丸雨飛の中を進むようなものである。おつかない話である。人間が安心して歩けるように、路上駐車や道路占拠は、何としてもきびしく取り締まってもらいたいのである。

人間は天命を全うしなければならぬ。

いかに世の中が進んでも、人間が人間を傷つけたり殺したりするようなことがあつてはならないのである。

苦い経験をもつ私は、車を運転する者と、違反を取り締まる立場にある者に、敢えてこれだけのことを訴えるのである。

(書誌学・近代文学研究家)

中世の歌集の中の霞ヶ浦

今 瀬 文 也

霞ヶ浦が和歌の題材としてとりあげられたのは、中世になつてからのようである。それも大部分は実景よりも遊戯的によまれている。

「新古今和歌集」に続いて、勅撰集が中世には数多く成立している。そして、その中に霞ヶ浦もよみこまれている。それらにはこれといった特色のある歌があるわけではないが、霞ヶ浦の名があるので、それらの歌に愛着を覚えるので紹介してみる。

「続千載和歌集」は十五番目の勅撰集で元応二年(一三二〇)のころ、二条為世によつて推進された。

立ちまよふかすみの浦の夕けぶり

それともよそにしる人ぞなき

行基僧正の作といわれる。かすみの浦を霞ヶ浦とみるのは問題があるかもしれないが、霞とけぶりをよく組合わせている。霞ヶ浦は春になると、いつもどんよりとけぶっていたのだろう。とにかく、霞と湖水との区別が